

市政トピックス

仙台すずめ踊り×徳島市阿波おどり ―伝統ある舞で両市の絆深まる

本市は、昭和45年に徳島市と観光姉妹都市提携に関する協定を締結して以来、友好を深めてきました。今年は3年ぶりに互いに訪問団を派遣し、交流を図りました。

本市からは、8月11日から13日に、郡市長や赤間市議会議長、仙台すずめ踊り選抜チーム「伊達の舞」などからなる総勢41人の訪問団を徳島市で開催された「2022阿波おどり」に派遣。開幕式をはじめ、5カ所の会場で「伊達の舞」が躍動感あふれる演舞を披露しました。阿波おどりの「ヤットサリ」の掛け声や振り付けをアレンジした舞が取り入れられ、観客はお囃子の軽快なリズムに合わせ、手拍子しながら楽しんでいました。

一方、9月17日から19日には、徳島市長を団長とした徳島市阿波おどり親善訪問団が来



▲夕暮れ時、テンポ良く跳ねて踊る姿は多くの観客を魅了しました

訪れた。阿波おどりの「ヤットサリ」の掛け声や振り付けをアレンジした舞が取り入れられ、観客はお囃子の軽快なリズムに合わせ、手拍子しながら楽しんでいました。

一方、9月17日から19日には、徳島市長を団長とした徳島市阿波おどり親善訪問団が来

市政トピックス



▲ぶらんどーむ一番町商店街では流し踊りが披露され、買い物客は足を止め見入っていました

仙。18日に市内各所で「徳島市阿波おどり振興協会選抜連」による阿波おどりが披露されたほか、ユアテックスタジアム仙台で開催されたサッカーJ2「ベガルタ仙台」対「徳島ヴォルティス」戦の前では、試合前のセレモニーとして、仙台すずめ踊りと阿波おどりの演舞が行われるなど、両市の絆を深めました。

市政トピックス

全国国分寺サミット ―史跡指定100年の節目に魅力を発信

若林区にある陸奥国分寺跡は、奈良時代に天災や疫病などを鎮めるために、全国に建立された国分寺の一つです。国の史跡指定から

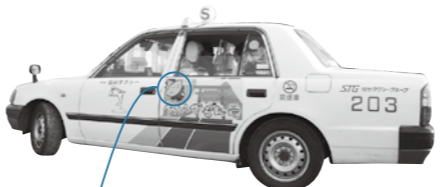
市政トピックス

「おいでもん号」で さあ出発！地域交通 の試験運行開始

1000年を迎える今年、「第12回全国国分寺サミット2022 in 仙台・陸奥国分寺」が10月8日に聖和学園高等学校サールナートホールを会場に開催されました。このサミットは国分寺跡を有する自治体が集まり、情報交換や魅力の発信を行うもので、本市での開催は初めてです。

当日は、東北大学大学院文学研究科の堀裕教授による陸奥国分寺の役割や政治史との関係等についての記念講演や、郡市長など自治体の首長らによるパネルディスカッションを実施。各地の国分寺跡の特色や活用事例などが紹介され、地域の方と連携して保存活用に取り組み重要性を確認しました。

約2000人の参加者は、コロナ禍の今にも通じる、感染症の収束を願った当時の人々に思いを寄せながら、真剣に耳を傾けていました。



▲「おいでもん号」。生田村の初代村長・長尾四郎右衛門さんをモデルとしたキャラクター「おいでもん」が安全運行を見守っています

太白区生出地区は、路線バスの便数が少ない、バス停までの距離が遠いなど、移動手段の確保に課題を抱えています。そこで、令和3年2月に同地区の町内会等で構成された「生出地区交通検討会」が発足し、地域交通の導入に向けた検討を重ねてきました。10月3日からは、市内5番目となる地域交通「おいでもん号」の試験運行を開始。事前予約制で、自宅と、地区内のスーパーや診療所など7カ所の乗降ポイントを直接結びます。安価な運賃で、買い物や通院などに気軽に利用することができ、試験運行の開始に先立ち行われた出発式で、検討会の山田勝三郎会長は「皆さんに利用していただき、生きがいづくりにつなげてほしい」と期待を込めました。

試験運行は令和5年3月まで行われ、利用実績の検証や改善策の検討を通して、「おいでもん号」の本格運行を目指します。

市政トピックス

宇宙を身近に―夢を テーマに授業を開催

各分野で活躍する社会人講師を招き、市内の小学校で授業を行う「仙台自分づくり夢教室」が、9月29日に生出小学校で開催されました。今回の授業は、行政や地域の課題解決に向け、民間企業等と連携を図る市の窓口「クロス・センター・ラボ」へ、JAXA（宇宙航空研究開発機構）から提案があり、実現したものです。

教室では、JAXA角田宇宙センター職員の下田遼太郎氏が講師となつて、JAXAの業務や役割について説明。参加した小学5・6年生22人は「1キログラムの物を宇宙に運ぶためには約100万円がかかる」といった、宇宙開発のスケールの大きさに驚きの声をあげていました。

市政トピックス

地域の防犯活動に貢 献された方を表彰

市では、10月17日に行われた全国地域安全運動第34回仙台市大会で、7団体・96人の方々を表彰しました。このうち、防犯功労団体、防犯功労者、退任感謝状を贈呈した方は、次のとおりです（順不同・敬称略）。

〔防犯功労団体〕 クリスマスロード商店街振興組合、大町地区防犯指導隊、中田中部地区防犯協会、吉成地区防犯指導隊、洞ノ口防犯協会女性部、岡田防犯協会、泉中央町内会

〔防犯功労者〕 志村勝夫、田村忠嗣、落合泰朗、佐藤敬夫、矢野晋司、笹原義信、結城勝美、瀬戸武男、高橋義明、渡辺光幸、加藤健、越後征男、錢谷裕介、小野寺俊弥

〔防犯指導隊員・防犯女性部員退任〕 小野修、青木良仁、甲田貞二、加藤茂、永野治、門脇照夫、遠藤信雄、西村喜美男、阿部東悦、加藤正敏、佐藤由里、菅原和子、相澤友理子

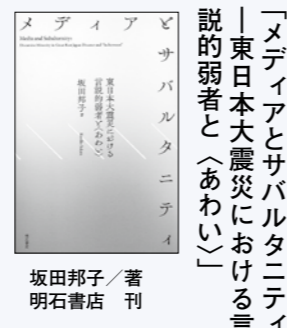


▲宇宙に関するクイズや質疑応答の場面では、目を輝かせながら積極的に参加する様子が見られました

市政トピックス

紹介した本は、11月1日より市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585

3.11 震災文庫を 読む



「メディアとサバルタニティ―東日本大震災における言説的弱者と「あわい」」
坂田邦子 著
明石書店 刊

「宇宙船の落ちた町」
根本聡一郎 著
角川春樹事務所 刊

この「震災文庫を読む」にはこれまでさまざまな書籍が紹介され、その中には数多くの被災者の証言も残されています。それでもなお、語る事ができない存在「サバルタン」が多くいることを筆者は提起しています。

震災を経験しながらも「私は被災者だろうか」と悩んだことがある方は多いでしょう。例えばそのような逡巡が、口を閉ざすきっかけとなります。筆者は、メディアが代弁することの難しさに触れつつ、「あわい」としてのメディアがその声を対話から引き出す可能性を探ります。

震災を経験した私たちだからこそ、さまざまな社会課題に対して声なき声に耳を傾けられるようになりたいものです。

作者の根本聡一郎は福島県いわき市の出身で、震災発災時は仙台在住の大学生でした。デビュー3作目となる本作で作者は、物語の舞台として初めて直接的に3・11の原発事故を想起させる出来事を描きました。主人公は、とある出会いから宇宙船事故で汚染された故郷の町と向き合うこととなります。

科学的な考証よりも、事故による地域や人々の分断と交流を中心に描かれる本作は、作者が震災後に宮城や福島でボランティアやNPOの活動を通じて得た経験が基になっているそうです。後半に主人公たちが交わす「対話」に青臭さを感じた時、現実社会の常識が私たちを縛っていることに気付きます。